

研究所だより

# 学術研究所の 新しい展開

学術研究所・副所長

松香光夫

昨年度は、文部科学省による「世紀COEプログラム」に玉川大学の「全人的人間科学プログラム」が選ばれるという、玉川大学の学術研究にとって、まことに画期的な年で

した。COE採択は、脳科学研究施設を中心とした、学術研究所の日頃の研究活動が評価されたものです。ただし、学術研究所にはその他にも特色のある研究施設があります。

特に今年度は、改組を含めていくつかの新しい研究施設が設置されましたので、全貌をご紹介します。

## 全人教育研究所との合併

最初に特筆すべきことは、これまで玉川学園に付置されていた全人教育研究所が、大学付置の学術研究所に組み入れられ、**全人教育研究施設**となったことでしょう。従来は、主にK-12（幼稚園から高等部）の教育活動を研究対象としてきましたが、今後は、大学の研究活動の成果を世に問うこととなります。もちろん、全人教育の活動のベースはK-12にありますから、引き続き初等・中等教育の教員とも密接に連携していきます。

これまで全人教育研究所として、玉川アドベンチャープログラム（**ACE**）を開発し、ユニークな教育活動が評価されていた部門は、**心の教育実践センター**として独立しました。

## 農工系の研究施設

次の二つの研究施設は、今回の大幅な組織改編の中でも変わらない、伝統のある施設です。

**ミツバチ科学研究施設**は一九七九年に創設され、現在に至るまで学術研究所の柱の一つとして活動しています。ミツバチの総合情報センターとして高い評価を受けています。

**脳科学研究施設**は玉川学園が掲げる全人教育に合わせて、「研究も文農工の学際的であるべきだ」という理念の下に、一九九七年に発足したユニークな研究施設です。初代主任・塚田稔教授（現・工学研究科長）の先見の明が、今回のCOE採択をもたらしたとはいえるでしょう。

工学部を中心とする施設には、生産開発工学研究施設がありました。研究の特色を名称でもアピールしようとして、新たに**知能ロボット研究施設**と**量子情報科学研究施設**の二つの研

# 研究所だより

## 学術研究所

全人教育研究施設  
(大原征而・文学部講師)

ミツバチ科学研究施設  
(吉田忠晴・学術研究所教授)

知能ロボット研究施設  
(塚田 稔・工学研究科長)

量子情報科学研究施設  
(広田 修・工学部教授)

脳科学研究施設  
(齋藤秀昭・工学部教授)

応用生命科学研究施設  
(河野 均・農学部教授)

菌学応用研究施設  
(奥田 徹・学術研究所教授)

人文科学研究施設  
(三井善止・文学研究科長)

言語情報文化研究施設  
(佐藤久美子・文学部教授)

心の教育実践センター  
(山本繁夫・教育学部助教授)

( ) 内は施設等の主任・主任代理

究施設に分割・独立させました。

後者は、広田修教授を中心として、量子通信理論を二〇年にわたり研究してきた成果が、国の内外で注目を集めたこと、この分野での研究実践が日米欧で急展開しており、その中軸として活動していることを評価したものです。

農学部関係の施設では、**応用生命科学研究施設**から、特に菌類の発・応用実績をあげてきた資源生物科学研究部門を、バイオインダストリーの観点から、**菌学応用研究施設**として独立させました。

文系の研究施設

昨年一〇月に発足したのが、**言語情報文化研究施設**です。英語・日本語獲得の発達過程の研究や、語学教育教材の開発を含めて、文化としての言語情報を扱っていきます。

最後の**人文科学研究施設**だけは、この四月からまったく新しく創設されました。玉川学園の全人教育の基幹ともなるべき、哲学・文学・芸術・歴史などの人文科学関係分野の教員を糾合して、共同研究を中心とした成果が期待されます。

花開く玉川大学の学術研究

このように学術研究所は、この四月に昨年の倍以上の規模の大研究所となりました。

その間にCOEの採択があるなど、玉川大学の学術研究の過程と成果が、花として開きつつあるのです。いみじくもCOEの「全人的人間科学プログラム」というタイトルが示すように、ここで咲いた花は、より深い形で教育に実ることになるでしょう。折々にその成果をご報告いたします。